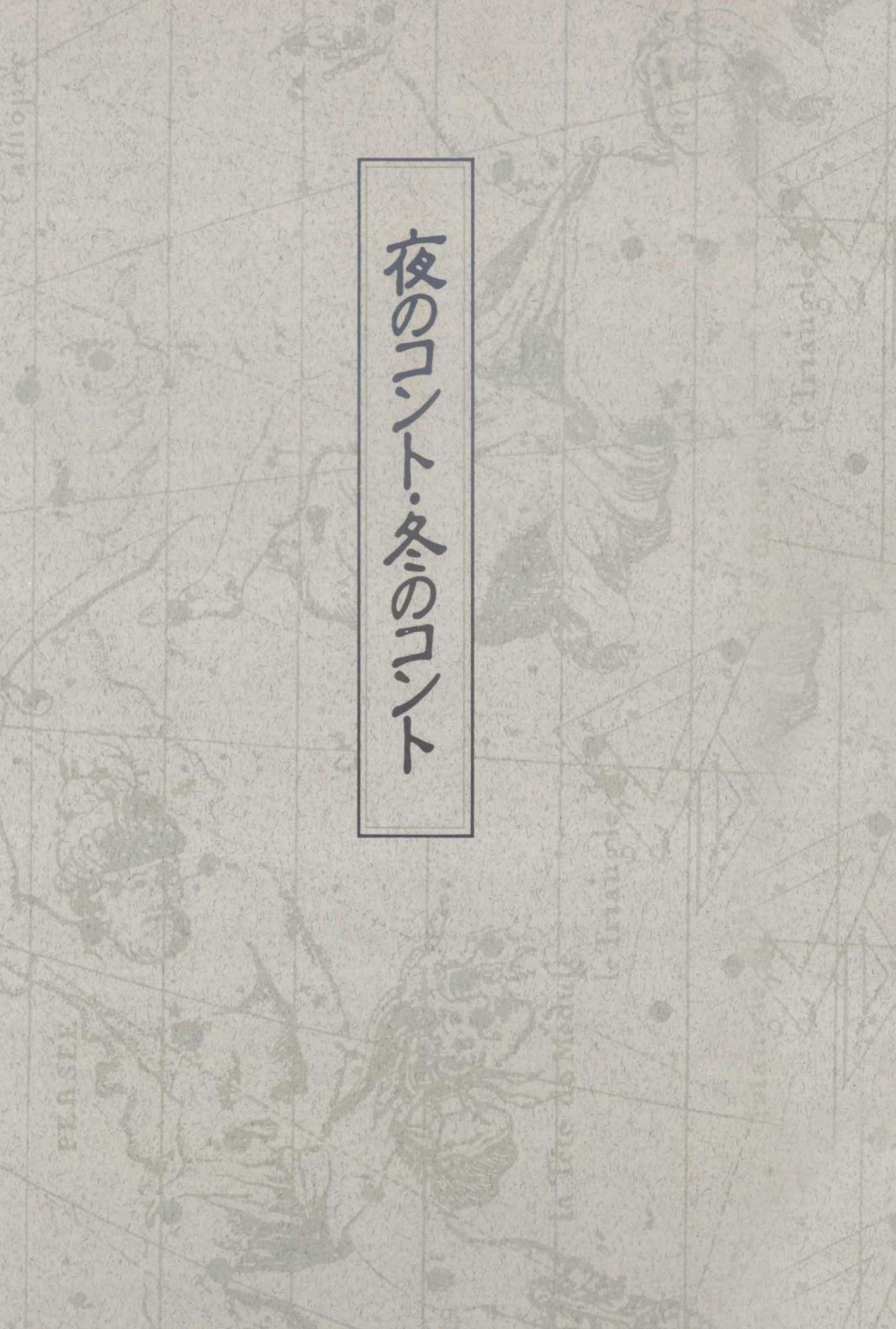


The background is a detailed celestial map or star chart. It features a grid of lines representing celestial coordinates. Various constellations are depicted with stylized figures and animals, such as a scorpion, a lion, and a centaur. A central figure, possibly a deity or a personification of a celestial body, is shown holding a staff or scepter. The overall color palette is muted, with earthy tones and soft blues and greens.

夜のコント・冬のコント

筒井康隆

夜のコント！
冬のコント



新潮社

夜のコント・冬のコント

印刷——一九九〇年四月一五日

発行——一九九〇年四月二〇日

著者——筒井康隆（ついでやすたか）

装画——大月雄二郎

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

所在地——162 東京都新宿区矢来町七一

電話——業務部（03）二六六—五一—
編集部（03）二六六—五四—

振替——東京四—八〇八

印刷所——二光印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

© Yasutaka Tsutsui 1990, Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-314519-6 C0093

夜のコント・冬のコント／目次

夢の検閲官	7
カチカチ山事件	19
魚	27
レトリック騒動	41
借金の清算	49
上へ行きたい	63
簞笥	71
巨人たち	85
鳶八丈の権	93

火星探検……………	107
のたくり大臣……………	119
「 ^{セント} 聖ジェームス病院」を歌う猫……………	133
冬のコント……………	147
夜のコント……………	159
最後の喫煙者……………	173
C I N E M A レベル9……………	189
傾いた世界……………	207
都市盗掘団……………	235

夜のコント・冬のコント

夢の検閲官

夢の検閲官は午後の十一時半、いささか酔いのまわった足どりで、夢の法廷にあらわれた。

「早く来てくださらないと困ります」先に来て、自席についていた初老の書記が、これも少し酔った眼を検閲官に向けて苦情を言った。「彼女がそろそろ夢を見はじめるといので、前意識や無意識の方からやってきた連中が、法廷の入口の向こうで列を作って待っております」

「すまんすまん」頑丈な体格の検閲官が椅子にかけた。「彼女最近、寝る前に台所で、料理用の酒を二合ばかり呑む癖がついとるだろ。あれがいかなのだよ」

「キチン・ドリンカーになってしまいましたな。おかげでわたしまでがほろ酔いに」ちよつと苦笑してから、書記は悲しげにうなずいた。「でも、まあ、しかたありますまい。彼女、ひとり息子に死なれたばかりです。呑まなきゃ眠れないでしょう」

「酔ったために、夢の検閲がおざなりになってはいかな。気をつけよう。こういう時はつい抑圧がゆるんで、不道德な夢や、覚醒につながる夢を見せてしまいがちになる。さて。さっそく始めようか」検閲官が大声で開廷を宣言した。「夢法廷を開廷する。最初の者を入れなさい」

「よし。お前だ。入れ」

廷吏に促されて最初に法廷へ入ってきたのは、鉄筋コンクリート三階建ての、時計塔のある校舎だった。

「これはまた、でかい者が入ってきたな」検閲官は校舎を見あげる。「この校舎はなんだね」

「ええと」書記は、彼女の前意識内や無意識内の雑然とした事物がすべて整理され、記されている図版入りの大きな台帳を見た。「これは、彼女の息子が通っていた中学校です」

「ううん」検閲官は唸った。「死んだ息子の思い出につながつとるのだろ。困るなあ。最近はこのういうものばかりが出てくる」

「なにしろ今は、息子のことしか頭にないのですよ」書記も少し困りながら、彼女を弁護する。

「死んでからまだ二カ月にしかありませんので、やってくるものといえば、息子に関係のあつた物や人物ばかりなんですよ」

「しかしだね、このようなものがナマで夢の中へ出てくれば、彼女はショックで眼ざめてしまう。いったん眼ざめてしまつたら、もう眠れなくなつて、またいつものようにひと晩中泣き明かすことだろう」検閲官は背すじをのぼし、決然として言つた。「よし。歪曲しよう。それがいちばん手っとり早い。できるだけ校舎とはかけはなれた種類の建物に改造して、夢に登場させよう」

「わかりました。といつても、もちろん彼女の記憶にある建物の中から選ばねばなりません」書記は台帳をいそがしくめくりながら言つた。「では、この、合掌造りの家屋にしましょう。彼女の故郷の思い出につながっていますから、心が安らいで、安眠は妨げられない筈です」彼は机の上のマイクのスイッチを入れて叫んだ。「歪曲用作業員。出勤してください。土木工事です」

すでに待機していた自我部前意識顕在科所属の、数十人の土木作業員がただちにあらわれ、中学校の校舎を大いそぎで合掌造りの家に改造しはじめた。

「よし。あれをやっておるうちに、次の者を通せ」検閲官が腕時計を見て言つた。「早くせんと彼女、本格的に眠りはじめるぞ」

天井のモニター・スピーカーから聞こえてくる彼女の寝息が、次第に深まりはじめている。

「次の者、入りなさい」

廷吏に呼ばれ、次に法廷へ入ってきたのは、兇悪な顔をした若い男だった。

検閲官はちよつとのけぞった。「すごい顔をしとるなあ。これは誰だ」

「これは彼女の息子のクラスの担任だった教師です」書記が説明する。「彼女はこの教師が見て見ぬふりをしたため、いじめが激しくなったのだと思っております。だからこそ息子が死んだのだと。実際はこの教師、こんな兇悪な顔はしておらんのですがね。ほとんど彼女の主観です」

「とはいっても、この男のこの顔、彼女にとつてはその息子の担任以外の何ものでもないのだろうが。いかんいかん。これも、このままだは出せん。他の人物とすり替えよう」検閲官は書記に訊ねる。「誰か他に、適当な人物はおらんかね。この男から連想できる、しかもこの男とはほんの些細な共通点しかない人物だ。夢の中じゃとてもこの男との連想は不可能という、その程度にしか共通点のない人物だ」

「ええと。それならたしか彼女の叔父さんというのが、島大造と言いまして」書記がまた、あわただしく台帳をめくる。「この教師の名が小杉大造ですから、大造という名前だけが同じです。ほかに似ているところはあります。あ、そうだ。彼女はこの叔父さんが嫌いでしたから、その、嫌いという点でも共通しますが、まさか連想することはできません。すり替えにはいちばん適した人物かと思われます」

「よろしい。この男をすぐ、その叔父さんに変装させろ」検閲官が叫ぶ。「メイクの女性を呼べ」
「いや。ちよつと待ってください」書記があわてて言った。「メイクアップさせている時間がありません。老けさせるのはたいへんな手間ですから、叔父さんそのものを呼び出して、そのまま

出演させます。あ、君はもう、戻ってよろしい」若い男にそう言ってから、書記はまたマイクのスイッチを入れた。「無意識レベル六におられる叔父の島大造さん。至急、夢の法廷までおいでください」

書記の机の上の、インターホンのブザーが鳴った。大脳中枢の指令所からだった。「夢法廷ですか。彼女、あと十三秒くらいで夢を見はじめます。作業をいそいでください」

「たいへんだ」書記はちよつとうろたえて言った。「まだ建物の改造工事が終わっていない」

「しかたがない。中途半端だが、あのまま出しなさい」と、検閲官が言う。

「よし。行け」と、書記は建物に叫んだ。

中学校の校舎から合掌造りになりかけている変な建物が、意識レベルへと去って行った。巨大なステージ・ドアがあり、その彼方は夢の舞台なのだ。

「屋根の天辺に時計塔があつて、八畳の座敷の床の間に黒板のある、変な合掌造りのままで出て行きました」

心配そうに書記がそうささやき、検閲官が唸った時、今までずっと無意識の下層階にいて、呼び出されることなど滅多になかった叔父の島大造が、とまどいながら法廷へひよこ入ってきた。和服に下駄ばき、頭の禿げた老人である。

書記にいきさつを説明され、彼はうなずいた。「へえ。ただ出ておればよろしいので。へい。わかりました」

老人はステージ・ドアを開いて、意識レベルへとひよこ入って行く。

「現在、夢を見はじめております」法廷内にスピーカーの音が響きわたる。

「さあ。夢の幕があがったぞ。次の者を入れろ」検閲官がいきこんで叫んだ。

「次の者、入りなさい」と、廷吏が叫ぶ。

呼ばれてぞろぞろと入ってきたのは、中学生と思える男子生徒の一団だった。

「たくさん来たなあ。この者たちはなんだ」

「彼女の息子の同級生です。この者たちにいじめられたことが、彼女の息子の死の、直接の原因です」

「またかあ」検閲官は頭をかかえた。「そもそも夢の役割の中でも特に大切なのが、本人に安眠を続けさせることなのだ。お前たちに彼女の夢の中へ出て行かれたら、彼女、怒りはじめて、たちまち眼をさましてしまうじゃないか」

「そんなこと言われたって」中学生たちが顔を見あわせる。「衝動さんたちから呼び出されたんだもん。なあ」

「こんなにたくさんでは、いちいち歪曲したりすり替えたりしてはおれんな」検閲官は書記に訊ねる。「うまい具合に、彼女がひとりひとりの顔を憶^{おぼ}えてはいなかったらしくて、こいつら皆、同じような顔をしておる。圧縮するか、ひとまとめにして象徴化してしまえる、いい手はないか。何かこのう、たつたひとつで、こいつら全員を暗示できるものだ」

「以前、彼女が息子の学校へ授業参観に行った時」台帳を見ながら書記は答える。「彼女が立っている教室のいちばんうしろから、席についている生徒たちのずらりと並んだ丸刈りの頭を見て、まるで黒いトウモロコシのようだと感じたことがあります」

「ようし。お前らすぐ、くつつきあってトウモロコシになれ」検閲官は叫んだ。「黒いトウモロコシだ。そんなものが夢に出てきても、まさか彼女、お前たちとは思わんだろう」

「でも、黒いトウモロコシなんて、腐ってるんじゃないかあ」

「いやだなあ」

わいわい言いながらも中学生たちはからだを寄せあい、丸刈りの頭を表面にずらりと並べて黒いトウモロコシに化けた。トウモロコシは床をころがってステージ・ドアを通り、夢の舞台へ登場する。

「では、次の者を呼びましょうか」と、書記が訊ねた。

「ちよっと待て待て。彼女いったい今、どんな夢を見とるんだ」検閲官は机の上のモニターのスイッチを入れ、画面を眺めた。

画面の中では、屋根の上に時計塔が突き出たおかしい合掌造りの中の、数式などが書きこまれた黒板のある奇妙な部屋で、叔父の島大造が腐ったトウモロコシをむさぼり食っていた。

「わはははははは。よし。これならなんのことかわかるまい」検閲官は安心し、書記にうなずきかけた。「では、次の者を入れなさい」

廷吏が入口のドアをあけるなり、法廷へは甘さと香りがいっぱい「やさしさ」が入ってきた。「やさしさ」は法廷に満ちあふれた。

「ほほう。これはまた、いっぱいのやさしさだ」検閲官が眼を細めた。

書記が説明する。「ええと、彼女は、息子が死んだのは自分にやさしさが不足していたせいだと反省しておるわけですね。それでまあ、今になって自分の、ありったけのやさしさをこのように総動員させておるわけですね」

「なるほどなあ」感動し、少しほろりとして検閲官はいった。「よろしい。しかし、やさしさというのはこのように形のないものだ。夢の中に登場させるためには、何かこのう、言い換えが必要だな」